

# 見瀬町

## 飛鳥に先立ち古代文化

いまの見瀬町を中心とした鳥屋・久米・白檀・南妙法寺町など、貝吹山の北ふもとに広がる一帯を古代には、身狭（むさ）や牟佐（むさ）と呼んだようです。

このことは現在、見瀬町の字庄屋垣内に牟佐坐（むさにいます）神社が鎮座し、西隣の鳥屋町に身狭花鳥坂（むさのつきさか）上陵Ⅱ宣化天皇陵があるほか、さらに江戸時代の国学者・本居宣長らも「ムサがミセになまった」の説を唱えていることなどから、まず間違いないと見られています。

また、この地に身狭村主（むさのすぐりⅡ日本書紀）や身狭村主相模（さがみⅡ続日本紀）など、多数の渡来人の住んでいたことが書き残されており、のちの飛鳥地域に先立ち古代文化の花が開いた一帯だったことも推測されます。

中世から江戸時代初期までの古文書に「三瀬村」とたびたび書かれた当地は、時代が下ると「見瀬村」となって明治時代を迎えます。ちなみに明治一五年ごろの戸数が一九五戸で人口が九五九人でした。

明治二二年「白檀村大字」となったあと昭和三年に「畝傍町大字」となり、同三一年一〇月の檀原市発足に当たり現在の「見瀬町」が生まれています。